新見公立大学紀要　第38巻
pp. 161－165, 2017

調査資料・報告

子どもの水遊びについて

－保育者養成の観点から－

渡部　昌史[1)*]・斎藤　健司[1)]・岡本　直行[1)]

1）新見公立短期大学幼児教育学科

（2017年11月15日受理）

保育者を養成しているA短期大学の学生を対象に、水を中心とした自然体験に関するアンケート調査を実施し、学生の自然体験の実態把握と保育者養成における水遊びの活動展開について検討した。その結果、本研究の対象者は、自然体験に触れる機会が多く、普段の生活の中でも自然を身近に感じたことがある学生が多かった。また、水遊びの活動を実践する際に、安全面が重要であると回答しているが、自然の厳しさをイメージしている学生は少なかった。よって、学生には、水に対するプラスのイメージを子どもにもたせる活動の展開について学修するとともに、自然に対する「こわさ」「危険」といった自然の厳しさに関する安全管理について教育することが保育者養成校に求められていると考えられた。また、保育者養成校の授業において、各領域の専門性を統合し、その内容を授業に取り込むなど、子どもと自然の関係をとりあげた総合学習の展開が望まれる。

（キーワード）自然体験、水遊び、保育者養成

Ⅰ．目的

保育者は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領[1)]、幼稚園教育要領[2)]、保育所保育指針[3)]のねらい及び内容に沿って、子どもと共存した生活を送りながら子どもの育ちを支えている。保育者の具体的な指導は、領域「健康」の心身の健康に関すること、領域「人間関係」の人とのかかわりに関すること、領域「環境」の身近な環境とのかかわりに関すること、領域「言葉」の言葉の獲得に関すること、領域「表現」の感性と表現に関することの5領域に分類される。園児は、保育者の5領域をもとにした指導により、様々な体験を通じてねらいに向かって成長していく。

保育の現場で主にみられる子どもの活動は「遊び」である。よって、各領域の指導は遊びを中心として、ねらいが達成できるようにすることが望ましい。とくに、公園や小川で身近な動植物に触れる、戸外の身近な素材や材料を使い制作し飾る、戸外にある遊具での遊びといった園外活動は、子どもの好奇心を促すと考えられる。保育者は、一人ひとりの発育発達に合わせた援助配慮をもとに自発的な園外活動を展開されていくことが求められる。

一方で近年は、交通機関の発達や紫外線の影響といった社会環境の問題が、幼児の危険リスクを高めるため、園外活動が敬遠されることがある。実際に、井上[4)]は、園児を対象に歩数調査を行い、園児の運動量が減少していることを報告している。その原因として、桝岡ら[5)]は、幼児の生活での行動範囲が狭小していること、屋外での遊びや行動が少なくなってきていることを推測している。したがって、近年の子どもは、園外での遊びが展開しにくく、減少している現状であると考えられる。しかし、子どもを園内に限った環境で生活させることは、幼児から自然に関わる機会を奪い、パターン化された活動の展開になる可能性がある。とくに、最近の幼児は、室内でテレビをみたり、ゲームをしたりなどといった映像と向き合った遊びをすることが増えており、自然と触れ合う機会が減少している。以上より、保育者は園外での活動を計画し、自然と触れ合う機会をつくることが重要であると考えられる。自然と触れ合う機会の活動を計画する際に、保育者は、自然のよさ、厳しさを子どもに伝えるとともに安全に活動が展開できるようにしていかなくてはいけない。そのような活動を展開していくためには、保育者自身が自然に関する体験をして知識をもっておくことが望ましい。

そこで、本研究では、保育者を目指している学生を対象に、水を中心とした自然体験に関するアンケート調査を実施し、学生の自然体験の実態把握と保育者養成における水遊びの活動展開について検討したので報告する。

Ⅱ．方法

1．調査対象

対象者は、A短期大学幼児教育学科2年次生48名である。

*連絡先：渡部昌史　新見公立短期大学幼児教育学科　718-8585　新見市西方1263-2

当該入学生の全員を調査対象としているが、全項目を回答していない学生については、対象外とした。

２．調査方法

調査は、アンケート用紙を配布し、回収した。質問内容は、「自然体験の有無」「生活場面での自然体験」をマークシート記入と記述（いずれも無記名）により調査した。

３．倫理的配慮

対象者には測定・調査に先立ち、目的・方法、個人名が特定されないこと、研究以外には使用しないこと、研究に協力しないことで不利益を被ることはないことを文章および口頭で伝え、回答が得られたもののみ承諾が得られたこととした。

Ⅲ．結果と考察

１．学生の自然体験について

図1は、大学入学以前の学校の授業や行事以外における自然体験を集計した結果を示したものである。「海や川などで泳ぐ」体験が100％で最も多く、次いで「生物を捕まえる」体験が89.6％、そして「魚を釣ったり貝を取る」体験が87.5％、また、「スキーなどの雪の中での活動」体験が87.5％と高い割合を示した。その他の項目も60％以上であり、本研究の対象者は、自然体験を多くしている傾向にあった。生まれ育った地域の主な風景を山、海、平野、住宅地の4区分にわけて答えてもらった結果において、山が54.2％と最も多かった。よって、本研究の対象者は、自然の残った地域の出身者が多く、自然体験に触れる機会が多かったと考えられた。

図2は、生活場面において自然を感じた体験を示してい

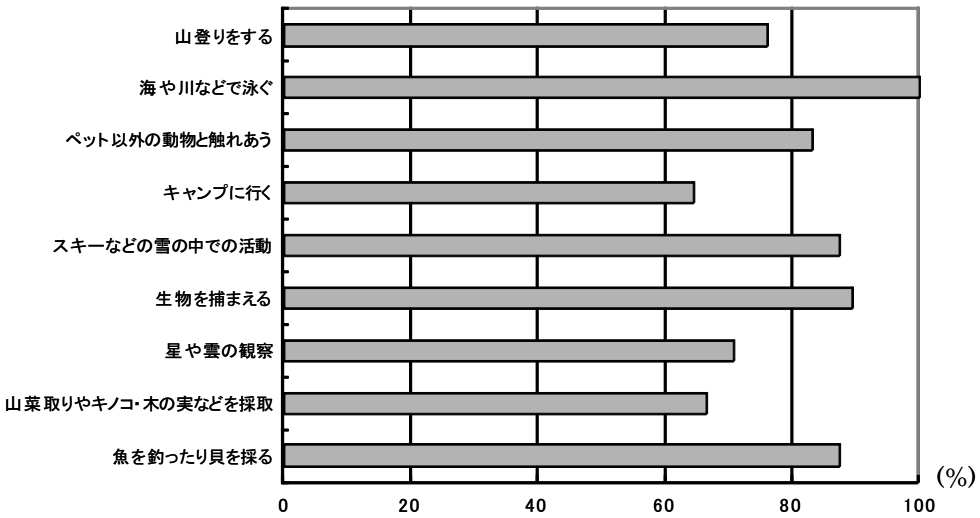

図１　自然体験の有無

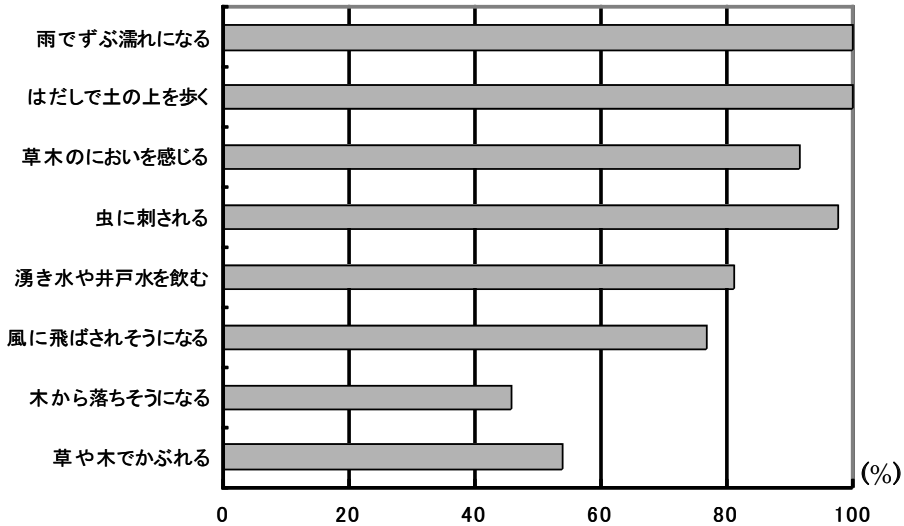

図２　生活場面での自然体験

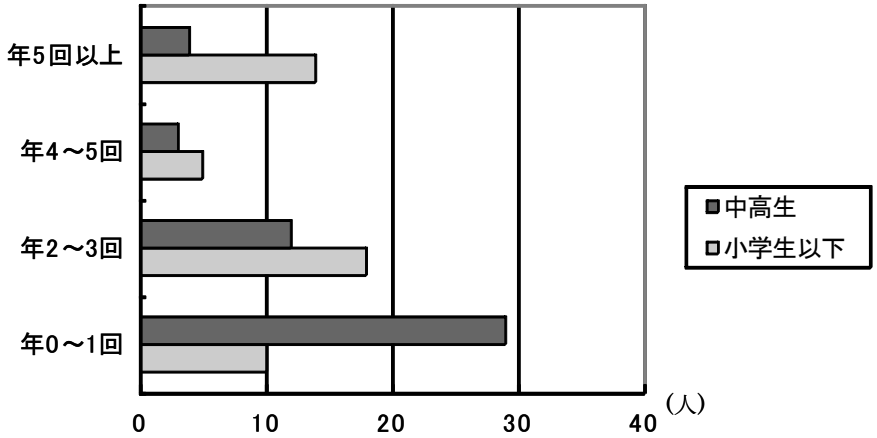

図３　１年間に海，川，湖に行った回数

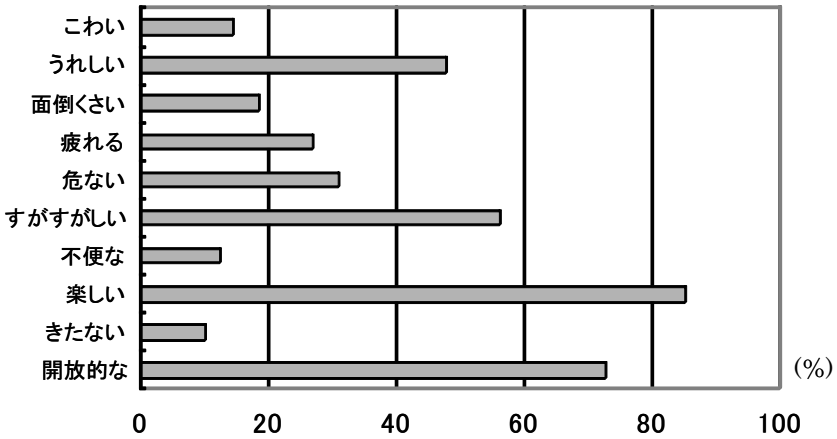

図４　自然体験活動のイメージ

る。「雨でずぶ濡れになる」「はだしで土の上を歩く」が100％で最も多く、次に「虫に刺される」97.9％、「草木のにおいを感じる」91.7％であった。本研究の対象者は、普段の生活の中でも自然を身近に感じたことがある学生が多かった。この体験は、自然を利用した遊びへの実践に繋がると考えられ、保育者にとって有益な体験であるといえる。

２．水に関する体験

(1)　自然の水で泳いだ経験と回数

本研究の対象者は、プール以外の自然の水（海・川・湖）で泳いだ経験が100％であった。また、図3は、1年間に海、川、湖に行った回数を小学生以下と中高生に分けて集計した結果を示している。小学生以下の時は年に2～3回が多く、中高生では年に0～1回の割合が多かった。

最近の子どもは、6割近くがプール以外で泳いだ経験がなく[6]、自然の水に触れる経験をあまりしていない。本研究の対象者は、自然の水に触れた体験は多かった。しかし、年に4回以上の割合が少なく、自然の水に触れた体験はあるが、その体験は少ないものであり、自然の水について理解するには十分な体験回数ではないと考えられた。

（２）　水遊びについて

最も思い出に残る水遊びは、小学生の時期が8割以上で最も多く（５歳以下８％、小学生84％、中学生8％、高校生0％）、小さいころの水遊びが、印象に残ることが確認できた。したがって、小さい頃に体験した水遊びは印象に残るため、楽しいと感じられる遊びを展開していく必要がある。自分にとって思い出に残っている水あそびを子どもに体験させたいか調査したところ、「是非させたい」「できれば体験させたい」と答えた学生が98％であった。さらに、乳幼児に水あそびが必要かどうか調査したところ、「必要」「どちらかというと必要」が100％であり、「必要でない」と答えた学生はいなかった。本研究の対象者は、自分の水遊びの体験を通して、水遊びが幼児教育に必要であると考えていることが確認できた。乳幼児における水遊びの配慮事項を調査したところ、安全面92％、健康面6％、遊びの環境設定2％であった。自然体験活動のイメージは、「楽しい」

85.4%、「開放的な」72.9%、「すがすがしい」56.3%、「うれしい」47.9%といったプラスのイメージを抱いている学生が多く、「面倒くさい」18.8%、「疲れる」27.1%などのマイナスのイメージをもっている学生は少なかった（図4）。また、「危ない」31.3%、「こわい」14.6%といった危険のイメージをもっている学生は少なかった。全国調査[7]では、「楽しい」、「開放的な」などプラスのイメージの割合が多いと同時に「疲れる」「面倒くさい」といったマイナスのイメージの割合も多く、本研究の結果と異なっていた。また、「危ない」「こわい」といった危険に関するイメージは、本研究の対象者と同様に低い割合であった。つまり、本研究の対象者は、小さい頃に体験した水遊びが楽しかったため、水遊びに対して肯定的なイメージをもっており、危険な体験はしていないことが推測された。

3．水を中心とした自然体験の授業展開について

本研究の対象者は、水遊びの活動を実践する際に、安全面が重要であると回答しているが、自然の厳しさをイメージしている学生が少なかった。これは危険な体験がなく、少ない自然体験の中で得られた楽しかった思い出からくるものだと考えられる。よって、学生には、子どもに水に対するプラスのイメージをもたせる活動の展開を学修するとともに、自然に対しての「こわさ」「危険」といった自然の厳しさに関する安全管理について教育することが保育者養成校に求められていると考えられる。とくに、急流や深みなどの危険箇所は、幼児の生命に関わってくるため、危険に対する認識をもつことは重要である。

また、保育者養成校においては、免許や資格を取得する目的があることから、カリキュラムが細分化されている。しかし、実際に園で見られる子どもの活動は、カリキュラムごとに細分化された活動ではない。つまり、園児の活動は、複数のカリキュラム内容が関連している。よって、関連した複数の科目内容を総合的に捉え、臨機応変に対応できる能力を養う授業も必要であると考えられる。その例として、運動遊びを行う領域「健康」、子どもの身近な環境を教える領域「環境」、豊かな感性を育て創造性を養う領域「表現」を関連させた「水辺と触れ合う総合学習」の授業が考えられる。授業の展開としては、各領域ではそれぞれの専門を生かした講義内容をするが、その中で15回授業の数回を「水」に重点を置いた講義を行う。領域「環境」であれば、水辺の自然や水と子どもの遊びについてやその援助配慮などを知識として学び、領域「造形表現」では水を素材とした遊びの可能性の探求やそのための遊具の開発、工夫などを実践する。領域「健康」では、身体の発達における水の役割、水を使った子どもの運動遊びなどの知識を得る。それらを別領域の授業で展開した後、「水辺への散策」と題し、実体験を得るために学外にて合同で「総合学習」を行うのである。

学生は、この授業を通して、①歩くことで身体に刺激がはいり、幼児の健康な心身の発達につながることを学ぶ②歩きながら生物、植物などの観察ができ、自然環境の素晴らしさを感じ取る③自然の水の良い所と悪い所を知ることができ、安全面への認識が深まる④自然の中で色や匂いなどを感じ取りながら、水辺のものを使った遊びや創作活動ができる⑤それらの一日の活動で得た体験や知識をもとに、子どもへの安全配慮について熟考し再認識するなど、多くの発見や知識が身につくと考えられる。このように、科目を関連させた授業が、将来的に自然と向き合った幼児の活動を展開するために必要な能力を養うことに繋がると推測できる。

現在、保育の現場では、外出することは危険リスクが高いと判断され、敬遠されることがある。しかし、自然体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が身についているという調査結果がある[8]。よって、幼少児の時期に自然に触れる活動は重要である。そのために保育者養成校では、実践的な総合学習を展開し、自然体験に関する保育者の資質向上に努めていくことが望まれる。

Ⅳ．まとめ

保育者を目指しているA短期大学の学生を対象に、水を中心とした自然体験に関する調査を実施したところ、次のことが明らかとなった。

1．本研究の対象者は、自然体験に触れる機会が多く、普段の生活の中でも自然を身近に感じたことがある学生が多かった。

2．本研究の対象者は、プール以外の自然の水（海・川・湖）で泳いだ経験が100%であった。年に4回以上の割合が少なく、自然の水に触れた体験はあるが、その体験は少ないものであった。

3．最も思い出に残る水遊びは、小学生の時期が印象に残ることが確認できた。また、自分の水遊びの体験を通して、水遊びが幼児教育に必要であると考えていることが確認できた。

4．乳幼児における水遊びの配慮事項を調査したところ、安全面と回答した割合が最も多かった。自然体験活動のイメージは、プラスのイメージをもっている学生が多く、マイナスのイメージをもっている学生は少なかった。また、危険のイメージをもっている学生も少なかった。

以上より、学生には、自然の厳しさに関する安全管理について教育する必要があると考えられた。また、保育者養成校の授業において、各領域の専門性を統合し、その内容を授業に取り込むなどの子どもと自然の関係をとりあげた総合学習の展開が望まれる。

文献

1）内閣府；幼保連携型認定こども園教育・保育要領.
2）文部科学省；幼稚園教育要領.
3）厚生労働省；保育所保育指針.
4）井上高光；歩数調査から見た子どもの変化（研究発表），Research Journal of Walking 2, 67-73, 1998.
5）桝岡義明・西村誠編著；体育遊びアラカルト，朱鷺書房，2003.
6）ミツカン水の文化センター；水にかかわる生活意識調査，2005.
7）子どもの体験活動研究会；子ども調査（平成14年度 第2回）.
8）青少年教育活動研究会；子どもの体験活動等に関するアンケート調査の実施結果について，1998.